

子どもと共に絵本を楽しむために

— 学生に必要な実践力とは — 【実践報告】

To Enjoy a Picture Book with Children

— The Required Competence of University Students —

次世代教育学部こども発達学科

大野 鈴子

OHNO, Reiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：読み手と聴き手，選書，挿絵，物語の世界，子どもの目線

要旨：幼稚園・保育所で毎日展開される子どもたちにとって楽しい活動として，絵本の読み聞かせがある。実習で，また，就職して，子どもと共に絵本を楽しむには，学生にとって，どのような実践力が必要なのかについて，実態から課題を明らかにし，文献を参考にしながら具体的な方法を考え，実践につなげていきたい。

特に，絵本の選書については，絵本の挿絵や文から絵本の質について考える機会を設けたい。また，読み聞かせにあたっては，読み手として，絵本の内容をどれほど精確に読み取ることができているか，そして，子ども目線で，子どもと共に絵本の世界をいきいきと心に思い描いて楽しめているかについて，実践を通して考察し，学生に必要な実践力について明らかにしたい。

Keywords：a reader and a listener, book selection, illustrations, the world of the story, viewpoint of children

1 はじめに

幼稚園教諭や保育士をめざす学生が，絵本の読み聞かせの実践にあたって，まず困るのは，選書である。子どもたちを取り巻く絵本環境は多様で，どのような絵本を選書して読み聞かせたらよいのかと戸惑っている。また，物語の世界を子どもと共に楽しむにはどのような配慮が必要なのかなどに課題を感じている。

そこで，自分自身が読み聞かせにあたっての課題を感じ取るよう意識付け，すぐれた絵本を知らせると共に，なぜすぐれているかに関する理論的背景を知らせていきたい。

そして，実践と理論を積み重ねながら，現場での実践力が身に付くよう指導していきたい。

2 研究の目的

子どもと共に絵本を楽しむために，学生にどのような実践力を身につけさせたらよいかの課題を明らかにし，解決に向けての具体的な方法を探っていきたいと考える。課題は，選書力，指導力，絵本の内容を読み取る力などの乏しさだと考える。課題解決に向けて以下の4点について，文献を参考に示しながら実践への意識を高め，子どもと共に絵本を楽しむ実践力を付けていくことを研究の目的としている。

(1) 子どもたちにどのような絵本を読み聞かせたらよいのか，選書の視点を探る。

選書する力について，松居（2003）は『絵本のよるこび』に，はじめて絵本を手にしたとき，何を見るのかについて書いている。

「はじめて絵本を手にしたときは，文を読まずに，

まず、絵を読むことが肝要です。その絵の読み方は、はじめから一場面ずつ、挿絵の線と形と構図とをしっかりと眼で確かめます。この三つの組合わせに、物語を語る力が秘められているからです。つぎに絵の細部にこだわってください。細部を丁寧に読みますと、物語のおもしろさがさらにゆたかにふくらみます。色彩がなくても、絵は物語をみごとに語ります。色に眼を奪われると、物語の印象が散漫になることがありますので、色彩の使い方は慎重でなくてはなりません。一見「かわいい」といった印象も、物語を読む力を減殺しかねません」とあげ、「まず、絵を読む。一場面ずつ、挿絵の線と形と構図を確かめること」を強調している。

次に絵本の画面の流れの連続性と変化を見ていく必要性に触れている。

「絵本の全画面を一つ一つ丁寧に読んでつぎにすることは、画面の流れ―連続性と変化の組合わせが、物語を途切れさせずに、しかも劇的な効果を語り伝えているかどうかをみます。出来のよい絵本は、絵を読んだだけで物語がよく読みとれます。たとえ挿絵の絵画表現がどんなに優れていても、物語を語らない絵では絵本になりません」とあげ、物語を語れる挿絵でなくてはならないと言っている。

そして、絵本の文については、音読をし、文を耳で確かめる大切さを伝えている。

「絵を読み終わった後は、文を読みます。それも通読するのではなく、一語一語を声に出して音読します。黙読はだめです。声の言葉には息がかよっていて、文字の言葉に隠されている言葉の生命をめぐめさせます。息づかい、響きの良さや耳障り、一語一語のつながりや転調、リズム感などが、物語にふさわしいか、また絵に語られている物語の世界を生かしきっているかななどを、耳で確かめます。声の言葉によって生命を感じとることは、子どもの聴き耳と気持ちを考えるととても大切なことです」(松居, 2003)とあげ、物語の世界を生かし切っている文かどうかを問うている。

また、文に対する留意すべき点として、物語が眼に見えるように、文が語り切っているかをあげている。

「絵本の文でもっとも留意すべき点は、物語を眼に見えるように文が語り切っているかです。終始、眼に見える文体で語られていませんと、子どもはイメージが途切れて、物語の外へ出てしまい緊張感が崩れます。作者の内なるイメージが曖昧ですと、どうしても説明調の文で話をつないでしまいがちですが、これは子どもの耳にはすぐわかります。説明的な文は禁物で

す」とあげ、子どもがイメージを膨らませて楽しめる物語とは、眼に見える文体で書かれていることだと伝えている。

選書にあたっては、以上の他に、おおよその発達年齢に応じた絵本であることや、その時の子どもの興味関心にあったものであることなども必要な視点である。

(2) 絵本を読み比べる時、絵本の質のよしあしをどのように判断したらよいかについて探る。

松居 (1973) は『絵本とはなにか』に絵本の質について書いている。

「子どもが見る挿絵の質により、子どもが描くイメージの質も当然影響を受けます。もし挿絵がとても質のよい、芸術的にもすぐれたものであれば、子どもの心の中に描かれるイメージもよいものになるでしょう。その反対であれば、まずしいイメージしかもてないこととなります。こうしたことの繰り返しは、子どもの想像力の質を決定してゆきます。二流、三流の質の、類型化したイメージの刺激にならされてきた子どもは、そういうイメージでしか受け止められなくなってしまいます。一冊の本を読んでも、そこにより豊かな世界を発見するか、ほんのわずかのものしかくみ取れないかは、読み手の想像力いかんです。その出発点の重要な一つが絵本にあるわけです」とあげ、質の高い挿絵の絵本を読み聞かせることは、子どもの心のイメージを高め、想像力の質を高めると伝えている。

また、子どもはどんな挿絵や内容の絵本を求めているのかについて、子どもの育とうとする願望から取り上げている。

「子どもはかわいらしくあるよりも、本能的におとなのように(子どもの目から見れば)自由に振る舞い、力強く、大きく、やさしく、頼りがいのある存在でありたいのです。早くおとなになりたいのです。強くなりたい、やさしくありたい、美しくありたい、といった子どもの願望は健康です。このすこやかな子どもの願いを、しっかりと受け止めて満足させるような内容と表現の絵本が大切なのです。いわゆるかわいらしい挿絵の絵本は、ほんとうは不健康な絵本ではないのでしょうか」とあげ、大人の一方的な見方で判断して選書して読み聞かせてはならないと伝えている。

脇 (2011) は『子どもの育ちを支える絵本』で、子どもは、言葉によるメッセージや教えを様々な出来事を体験して「こうしたら、こうなったな」と、納得を

具体的な記憶として蓄積しないと身に付かないとしている。

「主人公とひとつになって、出来事をくぐり抜けていけるようなストーリーは、体験の蓄積に役立ちます。ただしそれには、主人公に共感できること、出来事が具体的で想像しやすく、原因から結果に至る筋道が通っていること、結果に納得でき、しかも満足できる必要があります」とあげ、物語の中で体験でき、納得できる内容を求め、より質の高さを問うている。

(3) 読み手として、どのように絵本を読み語ったらよいのかについて探る。

松居 (2003) は、『絵本のよろこび』に絵本を読み聞かせる時の心構えについて書いている。

「子どもに絵本を読み語るときには、読み手がその絵本をどれほど精確に読み取り、また、その物語の世界を読み手自身がいかにかいいきいと心に思い描き、楽しんでいるかが問われます。語り手の読み取り方は、その声と表情に微妙に反映して聴き手の読み取り方に大きな影響を与えます。したがって、読み手が特に気を付けなければならないことは、その絵本の挿絵から、どれほど詳細に物語を読み取っているかということです。頁をめくって挿絵を見せるときに、挿絵が物語をどのように語っているかをしっかり読み取っていないと、ただ機械的に頁をめくることになりかねません。それでは絵本という独特の語りをもった芸術を生かすことはできません」とあげ、読み語り方について、物語の世界を読み手自身が心に思い描き、楽しんでいるかを問われ、頁のめくり方にも触れている。

また、松居 (1973) は『絵本とはなにか』で、語り手が心から語る重要性について書いている。

「絵本は単に読み聞かせるのではなく、その内容に共感し、感動し、興味を感じて、心から語る場合、聞き手にもっともよく内容が伝わるものです。語り手が感動し、共感している絵本は、語り手がよく理解し、心のなかに豊かにイメージを描き出している場合です。

語り手のなかに豊かなイメージができ上がっているほど、聞き手の方にそれは伝わり、聞き手の理解を深め、感動や共感を呼び起こします。これは語り手と聞き手の基本関係です。」とあげ、語り手の絵本に対する理解が、聞き手に伝わり、感動や共感を呼び起こすと伝えている。

(4) 幼稚園や保育所で読み聞かせ、絵本を友達と共

に楽しむことや、絵本からの体験と実体験とが結びつくことでより豊かな体験へと育っていくのではないかについて探る。

松居 (2003) は、『絵本のよろこび』で幼稚園や保育所で友達と共に読み聞かせを聞く楽しさについて書いている。

「先生の声で語られる絵本を友達みんなと一緒に聴く楽しみは、絵本を一对一で読んでもらう楽しみとはまた、違った喜びです。友達と“共に居る”ことで思わぬ場面で友達がため息をついたり、悲鳴をあげたり、怖がったり、手をたたいて喜んだりするのを見るのもおもしろく、イメージが拡がり実感が湧きます。また、互いに共感し合えることほどうれしいことはありません。こうした経験を通して、子どもたちの気持ちはいきいきとなり、感性は豊かに育ちます」とあげ、集団で読み聞かせを聴く楽しさや育ちについて触れている。

脇 (2011) は、『子どもの育ちを支える絵本』で、絵本からの体験と実体験が共に大切だと書いている。

「子どもの育ちに本来必要なのは、絵本よりもまずは豊かな実体験です。実体験には大切な二本の柱があって、そのひとつはお話を共有することを含む人間関係の体験であり、もうひとつが、身体を使い五感を使う体験です。身体を使い五感を使うのには、人工的な環境よりも自然環境が適していますから、これを自然体験と言い換えてもいいでしょう。ところがいま、この二本の柱がそろいもそろってやせ細り、子どもの育ちを支えきれなくなりつつあります。そのうち、人間関係の体験の不足を補うのには、すでに述べたとおり、絵本を読み聞かせることが大きな力になりうるのですが、じつは、自然体験の不足を補うに当たっても、絵本や物語が果たしうる役割はとても大きいのです」とあげ、実体験が大切といいながらも、体験不足を補うに当たって絵本の果たす役割が大きいことにも触れている。

以上、文献から、子どもと共に絵本を楽しむための学生への実践力についての基本的な考え方について述べた。

3 研究の方法

文献による課題解決に向けての4点を基本的な考え方とし、学生への読み聞かせによる調査や絵本の内容の読み取り、また、子どもたちへの読み聞かせ実践により調査し、結果を分析していくことにした。

(1) 調査対象と調査方法

本学、子ども発達学科2年生70名、3年ゼミ生12名を対象に、アンケートに記入方式で実施する。

実践は、学生同士や、近隣の私立保育園や公立幼稚園に出かけて読み聞かせを行った。

(2) 調査内容

①～④の質問項目への記入を通して、絵本に対する捉え方の変容や、選書や読み聞かせへの意識を高めることを調査目的とする。

①学生に異なる傾向の絵本として『はじめてのおつかい』（福音館書店）とアニメ絵本（ヒーロー・戦い・しつけの内容）を読み聞かせ、挿絵や文などについての質問項目に記入することで、それぞれの絵本の特徴を知る。

②絵本『おおきなかぶ』を福音館書店と他社（挿絵がはっきりとした黒い線で描かれ、鮮やかな色付けがなされ、文による説明が多い）の2冊の絵本を読んで比較する質問項目に記入することで、それぞれの絵本の特徴を知る。

③『あおくとときいろちゃん』（至光社）を読む前の印象と読後の感想を記入し、絵本の選書に対する意識がもてるようにする。

④1冊の絵本を読み聞かせるにあたって絵本の読み聞かせ前に、作者の絵本への思い、絵本のすばらしさ、読後の子どもたちの遊びなどについて質問し、絵本に対する思いを記入できるようにする。また、導入を考えたり、読み聞かせている時の留意についても記入したりし、1冊の絵本を大切に読み聞かせることができるようにする。

⑤幼稚園児、保育園児に読み聞かせを行い、どのように心を動かさせて聴いているか、挿絵と文が理解しやすいのはどんな絵本なのか、子どもたちは絵本のどんなところに心を動かさせているのかなどについての反応を分析する。

- ・『はじめてのおつかい』（福音館書店）
- ・『おおきなかぶ』（福音館書店）
- ・『おおきなかぶ』（他社のアニメ絵本）
- ・『あおくとときいろちゃん』（至光社）
- ・『はらぺこ あおむし』（偕成社）

4 研究の経過

学生へのアンケート調査と実践の経過をまとめる。

(1) 異なる傾向の絵本として『はじめてのおつかい』（福音館書店）とアニメ絵本（ヒーロー・戦い・しつけの内容）を読み聞かせ

『はじめてのおつかい』の読み聞かせ

問1 一番心を動かされたところはどこですか。

ア	坂道を駆け上がろうとして転んだところ	7%
イ	落としたお金を必死に探しているところ	8%
ウ	前よりもっと深く深呼吸して大きな声で「牛乳ください」と言ったところ	19%
エ	声を掛けられ、ぼろんとひとつ、がまんしていた涙が落ちたところ	47%
オ	牛乳を受け取り駆け出したところ	12%
カ	坂の下でママが手を振っているところ	7%

問2 なぜその場面で、心を動かされましたか。

ア	頑張っておつかいに行こうと思い、駆け上がろうとして転んだので	10%
イ	足が痛いのに、がまんしてお金を探していたので	8%
ウ	頑張らなくてとは、深呼吸して大きな声で言ったので	16%
エ	頑張っているところに、おばさんに「ごめんなさい」と言われたので	44%
オ	やっと牛乳が買えたと思い、走って帰ろうとしているので	11%
カ	ママ買ったよと、早く伝えようとしているので	11%

問3 挿絵と文はどうでしたか。

- ・絵と文が合っていて、話がわかりやすかった。
- ・みいちゃんの気持ちがよくわかる絵と文の書き方だった。
- ・落ち着いたやさしい色で描かれ、落ち着いて聴くことができた。
- ・みいちゃんの気持ちが音で表現され、分かりやすかった。

問4 みいちゃんの様子を具体的に表現しているところで、覚えているところを書いてください。

- ・転んだことよりもお金を落としたところに気持ちがいつているところ
- ・深呼吸をして「牛乳ください」というところ
- ・大きな声が出たことに驚いたところ
- ・涙がひとつこぼれたところ
- ・おねえちゃんだから買い物に行ける
- ・みいちゃん、もういつつだもん

- ・ドキン、塀にペタン、ジンジン痛む、ドッキンドッキンした、目がシュパシュパ、涙がポロンなどと書かれていた
- ・おつかいの間に成長がみえた

問5 読み聞かせる時、何を感じ取ってほしいと思いますか。

ア	頑張ればひとりでもできるという自信	24%
イ	頑張っているみいちゃんの気持ち	29%
ウ	おつかいをする意欲を引き出したい	7%
エ	自分の気持ちを伝える勇氣	40%
オ	その他	0%

<考察>

『はじめてのおつかい』は、挿絵と線と構図がしっかりしていて、物語の展開とともに画面が流れるように描かれている。また、物語が目に見えるように語られ、挿絵と文が共にすばらしく、子どもたちが主人公とひとつになって出来事をくぐり抜けるのにふさわしい絵本である。

質問事項に答えることで、物語の真髄に触れ、主人公みいちゃんと同じ体験をして、心動かされたところを、半数近くが「がまんしていた涙が落ちた」としている。それは、おばさんの「ごめんなさい」で張り詰めた気持ちに少し安心感が生まれた為だと考えている。また、みいちゃんの気持ちをドッキンドッキンや目がシュパシュパなどと表現されていることにも気付き、気持ちに寄り添って物語を受け止めようとしていると考える。

アニメ絵本（ヒーロー・戦い・しつけの内容）の読み聞かせ

問1 一番心を動かされたところはどこですか。

ア	カバくんが泣いているところ	1%
イ	カバくんがハミガキマンに歯を磨いてもらっているところ	15%
ウ	主人公とハミガキマンがムシバラスと戦うところ	28%
エ	主人公が口の中に入ってムシバラスをやっつけているところ	35%
オ	バイキンマンがぺちゃんこになったところ	7%
カ	特に心を動かされたところはない	14%

問2 この絵本の内容どう思いますか。

ア	主人公が助けるという決まったストーリー	33%
イ	おもしろい	23%
ウ	正義の味方が勝って、悪者が負ける話	24%
エ	何を伝えたいのかよくわからない	12%
オ	その他 歯磨きのしつけ	8%

問3 各頁を見て、絵と文の関係をどのように思いますか。

ア	絵だけ見てもストーリーがわかる絵主体である	42%
イ	絵の中に疑問符や感嘆符が書かれ文を補助説明している	10%
ウ	文が台詞中心である	13%
エ	絵がまんが的である	9%
オ	絵も文もはっきりし過ぎている	0%
カ	わかりやすい絵と文である	26%

問4 この絵本を選書するとしたら、どのような思いで選びますか。

ア	子どもが主人公を好きだから	28%
イ	ストーリーが決まっていてわかりやすいから	5%
ウ	まんがのようで楽しめると思って	5%
エ	絵を見ておもしろいと感じると思うので	19%
オ	虫歯予防のしつけのために	42%
カ	発達年齢に合った絵本だから	1%

問5 『はじめてのおつかい』とアニメ絵本とを比べて、内容的にどのように感じましたか。

- ・アニメ絵本は、心を動かされるという感じではないがわかりやすかった。
- ・知っているアニメだったから内容がいいというより主人公の登場でテンションがあがった。
- ・絵が違うところも楽しみ方が違うのかと思った。
- ・『はじめてのおつかい』はとても感動する話で、内容が濃い感じがした。アニメ絵本は決まったストーリーで、見なくても内容が読めるように感じた。

問6 子どもたちにどんな内容の絵本を読み聞かせていきたいと考えていますか。

ア	子どもの心に訴えるもの	32%
イ	読んで楽しいもの	37%
ウ	挿絵と文が美しく、内容が発展的でわかりやすいもの	8%
エ	発達年齢に合ったもの	19%
オ	まんが的で一目みて引き付けられるもの	2%
カ	その他	2%

<考察>

アニメ絵本で心動かされたところは、戦っているところであったり、やっつけるところであったりとアニメの画面を絵本で見ているだけで、心動かせるところはないを選ぶ学生もいた。

絵本として薦められないとしながら、わかりやすい挿絵と文であると考えている。そして、しつけのためなら読み聞かせたらよいと思っている。

『はじめてのおつかい』と比べると内容の充実度が大きく違っていることは理解できているが、楽しいもの、わかりやすい挿絵と文という点で、アニメ絵本を選ぶ学生がいると考える。

絵本を手にとるときの意識を質の高いものと考えようになってほしいと思う。

(2) 絵本『おおきなかぶ』を福音館書店と他社(挿絵がはっきりとした黒い線で描かれ、鮮やかな色付けがなされ、文による説明が多い)の絵本の2冊を読んで比較する。

問1 絵を読むという気持ちで見るとを伝え、各社とも絵だけを見て、適切な絵本を選ぶ。

福音館書店を選択(二者択一)

ア	力強い身体の動きが表現されている	76%
イ	元気な掛け声とそのリズムが伝わる様なポーズと構図になっている	48%
ウ	物語を途切れさせない劇的な効果がある	58%
エ	ロシア農民の暮らしが表現されている	61%

問2 読み聞かせ後、どちらの絵本が適切だと感じたかを選ぶ。

福音館書店を選択(二者択一)

ア	無駄のない簡潔な文と力強い絵で表現されている	78%
イ	音楽的で力強い繰り返しのリズムが感じられる文と絵の構図で表現されている	73%
ウ	子どもの息づかいと気持ちに合う言葉とリズムで表現されている	75%
エ	説明的な文ではなく物語が目に見えるように語り切っている	61%

問3 絵と文についての質問と実際に絵本の読み聞かせを聞いて、絵本の選択についてどのように感じたかを書く。(福音館書店と他社)

①他社を選択した理由

・他社の方が色あざやかで子どもに好かれると思っ

た。

- ・子ども向けのかわいらしい絵本である。
- ・他社の絵はアニメチックで子どもには伝わりやすいと感じた。
- ・絵を見たときは他社の方がわかりやすかったが、読み聞かせを聞いた後は、言葉と絵が合っていて福音館の方がわかりやすいと感じた。

②福音館書店を選択した理由

- ・福音館は絵本の中で一緒にかぶをぬいている気持ちになったが、他社はただ物語を聞いている感じだった。
- ・福音館は、同じかぶを引っ張るという行為にも、毎回違う角度から描かれており、繊細さを感じた。言葉にリズムがあり、おもしろみがあった。
- ・他社は文が説明的でガラガラとあって、会話が少ないが、福音館は文が端的なので、あきないと感じた。小さい時から見ていたので、福音館を選びたい。
- ・絵本の世界に入り込めるような印象的なセリフがあるのは良いと思った。みんなで「うんとこしょ、どっこいしょ」と言いながら楽しめる。

<考察>

絵本の選択理由を見るとわかるように、子どもが好きな絵本、適した絵本として、色鮮やかではっきりした絵、アニメ調の絵をまず考えることがわかる。

しかし、実際に自分が読み聞かせてもらい、子どもに読んでみて感じ取ることで、文や挿絵のすばらしさを知り、選書の仕方の一歩を踏み出している。

幼いころ見た絵本が心に残っており、絵本の真のすばらしさを学生に、また今後かかわる幼児にも伝えていってほしいと思う。

(3) 『あおくときいろちゃん』(至光社)を読む前の印象と読後の感想を記入し、自分の変容に気付き、絵本の選書に対する意識を高める。

問1 自分から手にとって見て、読み聞かそうと思うか。絵本の印象はどうか。

- ・絵がシンプル過ぎて、興味をもって楽しめずストーリー性が感じられない。
- ・さみしそうな絵で、色が混ざって変化する話で、絵を描く前に読んだらよいと思った。
- ・シンプルで子どもの想像性が膨らみそうな絵本だと思った。

- ・色にも気持ちがあるという不思議な感覚をもつ絵本だと思った。

問2 読み聞かせを聞いての感想はどうか。

- ・いろいろな形に色が付いているだけであったが、読み聞かせによって、それにも感情や物語があるのがわかっておもしろかった。
- ・同じ色や形で不思議な感じがし、引き付けられた。見ただけでは何を伝えたいかわからなかったが、読み聞かせを聞いて、伝えたいことがわかった。
- ・色しかないため、自分なりに考えることができた。単純に色を組み合わせているだけだが、ただの色が人のように見えて感情も伝わった。不思議な世界観であった。

問3 絵本についての説明（作者レオ・レオーニの生涯、絵本の作成の意図と経過）を聞いて、印象は変わったか。

（全員が印象が変わったと回答）

- ・正面から向き合っていく気持ちを絵本で表現していることがすごいと思った。あおくんときいろちゃんは素直な気持ちを正面からぶつけているのだと思った。
- ・単純だと思っていたが、その単純でシンプルさが大切なのだと思った。何も描かれていない余白の部分にさえ、イメージを膨らませるような働きがあると知った。
- ・なぜ文章が短いのだろうと思っていたけど、説明を聞いて、子どもにとってはこのような完璧で無駄がない言葉が、的確でわかりやすいのだと知った。
- ・ただ近くにある絵本を選べばいいというものではなく、子どもにどんな影響があるのかを考えて選ぶと思った。

<考察>

『あおくんときいろちゃん』の読み聞かせを聞き、シンプルな挿絵と文に不思議な感動を覚えているのは目で見ただけでなく、耳から聞く音読によると考える。

また、作成の経過や意図を聞き、絵本の見方をより深く知り、一冊の絵本を精確に読みこむ重要性を感じるようになったと思う。

(4) 1冊の絵本を読み聞かせるにあたって

一人一人に、選書した絵本の読み聞かせをさせた。

作者の絵本への思い、その絵本のすばらしさ、読後の子どもたちの遊びについて等を質問し、絵本に対する思いを深めた。

『スイミー』（好学社） A学生

問1 導入で気をつけたことは何か。

集中して見ることができるよう、周りを片付け、落ち着いた環境にした。魚釣りが好きなので話をし、関心をもてるようにした。手遊びをするなら、「さかながはねて」をする。

問2 読み聞かせているときどんなことに気をつけたか。

絵本の挿絵に手がかぶさらないように気を付けて持ち、幼児の目線を考え、絵本の高さにも気を付けた。全体に聞こえる声ではっきりと読み、必要な部分では感情をこめて読んだ。場面や内容を下読みして把握しておき、ページのめくり方にも気を付けた。

問3 作者はこの絵本で何を伝えようとしているか。

一人ぼっちになっているスイミーが、海の中にあるものを見て、元気を取り戻すことと、みんなで協力して大きな魚の形を作り、みんなを食べた大きな魚を追い出し、安心して過ごすことができるようになったこと。

問4 絵本の文や挿絵のすばらしいところはどこで、その理由は何か。

はっきりと描かれているのはスイミーだけで、他の魚や海の中は、すこしばかした表現にしているように思い、挿絵のすばらしさを感じる。次はどうなるのかなと子どもとともにわくわくしながら見るができる展開になっている。

問5 読んだ後、どんな遊びや活動が生まれると思うか。

どんな魚がいるのかなと図鑑で調べたり、魚を育ててみたいという子どもが出てくるのではないかと思う。

また、魚を作って魚釣りごっこをする子どももいるのではないかと思う。

『わたしのワンピース』（偕成社） B学生

問1 導入で気をつけたことは何か。

「明日、服を作って遊ぼうと思うけどどんなのがい

いかな」と投げかけ、期待をもって見るができるようにした。明るく一人一人の目を見ながら話し、反応を受け止めた。

問2 読み聞かせているときどんなことに気を付けたか。

子どもたちの表情を見ながら読み進める。見えにくくはないか、声の大きさはよいか、次のページを期待を持って見ているかなどに留意した。文のないところは、子どもの反応を見て、言葉を足した。

問3 作者はこの絵本で何を伝えようとしているか。

現実では起こらない夢の世界だが、幼いころ何度も読んでもらってそんなになつたらいいのに、そんなワンピースがほしいと思ったように、美しい色と言葉で、子どもに夢とわくわくする楽しさを伝えている。

問4 絵本の文や挿絵のすばらしいところはどこで、その理由は何か。

すばらしい発想は、散歩に出かけたら、ワンピースの模様が変なところである。模様は、自然がいっぱいで、自然を大切にしているとも思った。「ララン、ロロン」「似合うかしら」という言葉は、みんなと自分に問いかけ、喜びが表れていてすてきだと思った。

問5 読んだ後、どんな遊びや活動が生まれると思うか。

イメージをひろげ、自分だけのワンピースを作りたいと思う。絵本とは違う模様のワンピースを作り、友達と見せ合って遊ぶ。ワンピースを着て劇もすると思う。

<考察>

一冊の絵本と向き合うことで、導入と読み聞かせへの配慮などの実技面と、絵本の挿絵や文についてや、作者の意図を理解しようとする意識の高まりが感じられる。そのような姿から、絵本を楽しもうとするわくわく感が伝わる。そして、その心の動きは、イメージをひろげ、読後の子どもたちとの豊かな遊びへとつながると考える。

他のより多くの絵本にも向き合うきっかけになり、絵本の楽しさを感じてほしいと思う。

(5) 幼稚園児、保育園児に読み聞かせを行い、子ど

もたちは絵本のどんなところに心を動かさせているのかなどについての反応を分析する。

①『はじめてのおつかい』（福音館書店）の読み聞かせ

3歳児：「おつかい？」とか、転んだところで「あっ」「あっ、ねこ」、牛乳が買えたところで微笑むなど、場面に反応している。

4歳児：転んだところで「あっ」、落ちているお金を指差し「あそこ」と言う。3回目の「牛乳ください」に心配そうな顔をし、買えたところで微笑む。場面の流れを感じて見ている。

5歳児：「おつかいできる」と言い、転んだところでは「あーあ」と言い、お金を探す様子に「草のところ」と指差し、「転んだら痛いよな」と言う。牛乳が買えたところで「買えたよな」と友達と顔を見合わせる。裏表紙を見て「牛乳飲んで」と言う。笑顔の子どもが多い。流れを把握し、主人公に思いを寄せている。

<学生：発達年齢により、子どもの反応に違いがあり、主人公への思いの寄せ方に成長を感じた>

②『おおきなかぶ』（福音館書店）と『おおきなかぶ』（他社のアニメ絵本）を読み聞かせる。（4歳児）

アニメ絵本を読んだ後に、福音館の『おおきなかぶ』を読み聞かせると、後者の方が反応がよく、途中から自然に子どもから「うんとこしょ、どっこいしょ」と掛け声を掛けながら読んだ。

その後、園を訪問した時、大きなかぶの劇遊びをしたこと、大根を抜いたときに、「うんとこしょ、どっこいしょ」の掛け声で抜いたと聞いた。

<学生：2冊の絵本の反応の違いに驚いた。子どもに適したよい絵本があることを実感した。絵本から遊びが展開される様子も知ることができ、選書の大切さを感じた>

③『はらぺこ あおむし』（偕成社）を2・3・4・5歳児に読み聞かせた。

<学生：5歳児から順に読み聞かせを行いながら、自分の読み方が変わってくるのを感じた。>

5歳児は、子どもが自ら、「食べすぎ」「お腹が痛くなる」「ちょうになるよ」などと先を予想し、反応しながら見ることができ共に楽しめた。4歳児は、なし2個、すもも3個と子どもの顔を見ながら読むと、

「食べすぎ」と反応し、ちょうを「きれい」と喜んだ。3歳児には、あおむしが食べた穴を押さえながら読むと、美しい色合いを楽しんでいた。2歳児には、より物語が楽しめるように子どもの顔を見ながら、ゆっくりと絵を指差しながら読んだことで、共に楽しむことができた。子どもと共に楽しめるようにと、年齢によって、自然に読み聞かせ方を変えた。

<考察>

実践を通して、選書し質の高い絵本の読み聞かせが必要であることや、発達年齢に応じた読み聞かせ方があり、子どもも年齢に応じた読み取り方があることがわかった。子どもを前にして、体験から感じ取ることが重要である。

5 まとめ

- ・選書については、音読し、挿絵や文を比較することで、すばらしさや疑問点に気付いていき、選書のポイントを知ることができたと考える。
- ・挿絵については、学生の感覚ではわかりやすくはつきりとしたものかと考えていたが、質のよい芸術的にもすぐれたものでなければ、子どもの心とイメージを高めることができないと感じている。実践と一冊一冊の絵本に向き合うことで、挿絵と文への意識を高めることが重要だと考える。
- ・読み聞かせ方は、絵本をどれほど精確に読み取っているかによると自覚できるようになっている。できるだけ子どもを前に実践していき、物語の世界をいきいきと心に思い描き、楽しめるように自分自身を高めることが必要だと考える。
- ・実践力を高めるには、文献を参考に、一冊一冊の絵本とていねいに向き合い、挿絵と文から物語の世界を、子どもと共に楽しむ経験を積み重ねることが重要だと考える。
- ・今後の課題として、絵本をどれほど精確に読み取って読み聞かせるかが、聴き手の読み取り方にどれほど影響を与えるのかについて探していきたい。

参考文献

- ・秋田喜代美・野口隆子編著（2009）「保育内容 言葉」光生館
- ・阿部明子・小川清実・戸田雅美編著（1997）「保育内容 言葉の探究」相川書房
- ・武田京子（2006）「絵本論」ななみ書房

- ・谷本誠剛・灰島かり編著（2006）「絵本をひらく」人文書院
- ・徳永満理編著（2009）「赤ちゃんにどんな絵本をよもうかな」かもがわ出版
- ・奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会編（1976）「絵本との出会い」ひかりのくに株式会社
- ・松居直著（1973）「絵本とは何か」日本エディタースクール出版部
- ・松居直著（2003）「絵本のよこび」NHK出版
- ・脇明子（2008）「物語が生きる力を育てる」岩波書店
- ・脇明子（2011）「子どもの育ちを支える絵本」岩波書店